様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：３２４０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２０３３

研究課題名（和文）レリギオとレギオの狭間：セファラディーム・アシュケナジーム・ミズラヒーム

研究課題名（英文）Between Religio and Regio:Sephardim,Ashkenazim,Mizrahim

研究代表者
田村　愛理（TAMURA, Airi）

東京国際大学・商学部・名誉教授

研究者番号：５０１６６５８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、宗教的普遍性（religio）と地域的固有性（regio）の狭間で生きる場を選択してきたユダヤ教徒のアイデンティティ選択戦略を比較研究し、人間が本来持つ複合的で柔軟な集団編成のあり方を提示する。研究成果は、以下に集約できる。1)ユダヤ教徒に限らずマイノリティ集団存続の要因には、越境性とこれを可能にする多束ネットワークがあり、2)これらの行動を支える基盤として個々の多元的複合アイデンティティが存在すること。
このような越境的多束ネットワークや非同心円的アイデンティティは、我々が自明としてきた地域文化的境界に基づく固定的アイデンティティを前提とした近代国家体系相対化の可能性を示唆している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は以下である。1)地域研究としては、セファラディーム、アシュケナジーム、ミズラヒームのヨーロッパと中東にわたるユダヤ教徒の歴史的アイデンティティ変遷を扱う広汎な比較地域研究である。2)方法論的に、地域研究・歴史人類学、社会思想史、哲学という異分野研究者の共同研究であるため、広範囲な学術・社会的影響が望める。3)学術的独創性として、近代国家の相対化をその基盤である個人の帰属意識＝アイデンティティ構造に遡って考察したこと。即ち、アイデンティティを所与と捉えずに、本質的に流動的で変遷し選択されるものとして設定し、その複合的構造を個々人がおかれた歴史的状況の中から抽出しようとした。

研究成果の概要（英文）： This research analyses a flexible and multiple way of constructing group identity that human beings have had, through comparative studies of Jewish communities.Their identity selection strategies are to balance their living places between religious universality (religio)and regional endemism(regio).
The research results can be summarized as follows.1)The primary factors for the survival of minority groups, not only just Jewish people, are the sustaining transboundary nature and their multi-node networks, and 2)for supporting these natures and networks, multiple and and complex identities embedded in the basis of human beings plays essential roles that seemed overridden by modern single and concentric national-identity.
Such transboundary and multi-node networks and non-concentric plural identities offer us the possibility of re-examining of the Nation-States system that we had constructed on the single immobilized stereotype identity, which entails exclusion of others.

研究分野：地域研究、歴史人類学

キーワード：ユダヤ教徒　マイノリティ　アイデンティティ　セファラディーム　アシュケナジーム　ミズラヒーム　越境的ネットワーク　近代国民国家

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近代国家は、ヨーロッパがその歴史から生み出した強固な自我意識に基づく個人主義の上に成り立っていると信じられてきた。これはまた、自身と他者を明確に隔絶する二項対立を生み、そこから無数の紛争を生み出してきた。現代では、「個」のアイデンティティの基盤が、国家やそれを形成する民族と固着し、それがあたかも自然自明のことのように思われている。そのような世界では、多元的、複合的な自己認識などは、精神疾患のような病理として捉えられてしまっている。

これまで多くの研究においても、このような近代国民国家が原理的に持つ様々な問題点が指摘され、検証が行なわれている。本研究での申請者たちも、田村は、チュニジアのミズラヒーム（アラブ・アフリカ系ユダヤ教徒）を研究対象として、かれらの複合的なアイデンティティ形成過程と近代国民国家の基盤としての同心円的アイデンティティ形成を対比させ、近代国家体制の矛盾を論じた。川名は、近世ポーランド国家におけるユダヤ教徒を始めとする様々な民族的，宗教的マイノリティが、自身の宗教的普遍性を保ちつつ，同時に特権を軸として近世国家に特有の分権主義的構造の中に独自の自律性を築いていった過程を跡付けた。また、従来スピノザを中心とする西洋近代哲学の研究に従事してきた吉田は、スピノザとその一族の来歴を読み解いていく過程で、セファラディーム（イベリア半島系ユダヤ教徒）たちのさまざまなアイデンティティ形成の試み（と、時にそのさまざまな挫折）に関心を寄せ研究成果を発表してきた。

以上、本研究開始までの研究で申請者らは、世界の諸地域において、近世から近代にかけて周縁に配置された諸要素が、国家の境界を越えたネットワークを形成し、また強固な絆で中央の政治経済に深く関わるという、多元的共存世界の存在を明らかにした。これらの成果を踏まえた上で、本研究では、さらに一歩踏み込んで、研究対象をユダヤ教徒に絞り込んだ。境界を越えるグローバルな構造が複雑に交錯する状況の中で、普遍的アイデンティティを保持する一方で、諸地域の文化的属性を有するユダヤ教徒が、いかに自己の生きる場におけるアイデンティティを確立／組み換えて来たのかという個々のアイデンティティ戦略に研究の焦点を絞り、その複雑な現象を、「ユダヤ教徒／人」（以下ユダヤ教徒とする）がたどって来た来歴を軸に検証する。

２．研究の目的

本研究は、各時代、各地域の「個」としてのユダヤ教徒と、それを「普遍」として包み込む宗教の関係を比較研究することにより、近代的な思考に慣れてしまった我々が自明のものと思い込んでいる、同心円的な「個」のアイデンティティ構造の再検討を目指す。比較検討の対象として、セファラディーム、アシュケナジーム（東欧系）、ミズラヒームのユダヤ教徒社会を取り上げ、時代的には各研究者の専門に応じて、近世、近代、現代にわたる。これらを比較研究する事により、ユダヤ教徒の歴史的なあり方は、「個」としてのユダヤ教徒そのものが、多元的、多層的な文化的・宗教的記憶を操作しつつ、それぞれの場での存在を選択してきた、脱境界的な多面体であることを示すことになろう。ユダヤ教徒のアイデンティティの変遷は、外的な要因との交わりによるものばかりではない。 ユダヤ教から他宗派への改宗や、ユダヤ教徒共同体からの破門という形で、自らのアイデンティティを解体、再構築する現象も観察される。

本研究では、近世以降のキリスト教社会およびイスラム教社会の中で、ユダヤ教徒が国家や社会と具体的にどのように折り合いをつけながら自らのアイデンティティを形成してきたか、その変遷の過程を明らかにする。ユダヤ教徒は、長いディアスポラ（離散）の歴史の中で、近年まで自身の国家を持たずに世界各地で共同体を築き維持してきた、と見做されてきた。しかし、実際には、ローマ時代に格段に増加した地中海地域のユダヤ教徒人口の多くはそれぞれの土地の外部からの移住者ではなく、ローカルな文化的影響の下に生きてきた人々であるということが最近の研究で注目されてきている。彼らは土着の人間でありながら、同時にディアスポラ神話を受容するユダヤ教徒という両面性を共有し、地域の境界を越える集団としてのアイデンティティをも持つことになった。むしろこのような脱境界的で複合的なアイデンティティが、歴史を通してユダヤ教徒を概念的に規定して来たと言える。ユダヤ教徒は、教義上広がる各地の共同体からの外部ネットワークを持ちながらも、特定の時代に特定の地域に居住することで、当該地域の条件に適合的なアイデンティティも有してきたのである。この両者間の比重は時代によって異なり、近世社会の帝国的構造においては、両者は相対的に釣り合っていたが、近代の国民国家形成過程で、領域国家的アイデンティティが一面的に強制されることになると様々な面で不適合を起こすことになる。本研究では、広汎な地域と時代に広がるユダヤ教徒の存在の有り方の比較研究を行う事により、近代国家の構造を一旦解体し、その縛りから解放することで、ユダヤ教徒のみならず、人間のアイデンティティ構造の核心構造を見て取ろうとするものである

３．研究の方法

本研究は、各自の研究方法を土台にした学際的な比較研究の手法に基づき、３段階にわたって推進された。第 1 段階では、文献収集や現地調査等で従来の各自の研究深度を深めると共に、本研究の軸であるユダヤ教徒のアイデンティティのあり方を、その歴史的変遷を含めて再構築

し、 相互の研究のすり合わせを行なった。第２段階では、さらに各自の研究テーマを追求すると共に、相互の比較検討を進め、担当する各地域、各時代の特性を抽出した。第３段階では、各自の研究が単なる個別研究という陥穽にはまることのないよう、それぞれの時代、地域の事象を比較検討し、構造的特徴を明らかにしようとした。

第１段階では、各自の研究を進化させるために、史料収集と文献調査および研究対象地での調査を行なった。研究代表者の田村は、歴史人類学的な手法でのフィールドワークを支える事前段階としての資料調査を行った。研究分担者の川名は、これまで進めてきた近世ポーランド国家のマイノリティの研究からアシュケナージ系ユダヤ教徒の事例を抽出し、改宗の問題を中心にそのための史料調査を目指した。同じく研究分担者の吉田は、近世ヨーロッパのセファラディーム系ユダヤ教徒社会におけるさまざまなアイデンティティ形成の試みと、それに伴う困難を類型的にまとめるため、まずは国内において文献調査を行ない、資料の所在情報の確認と研究史の整理を行なった。研究の検証のため、各自は研究会でそれぞれの研究経過を報告し、相互の共通認識を深めていった。さらに関係するテーマを研究する外部講師に講演を依頼した。国内外で収集した史料は、映像資料も含め、著作権に問題がない限りにおいて、より多くの研究者の利用に供すること目指し、研究会の情報は公開し、外部からの研究者の参加を促した。

次に第２段階では、前年度のフィールドワークや文献資料で得た成果を中心に、作業を行なった。田村は、多文化共生社会研究者との意見交換を行うと共に調査地であるチュニジアのジェルバ島への調査に赴いた。川名は、前年度のポーランドでの調査で得た史料、文献の解明を進め、近世における世界最大のユダヤ教徒の集積地であったポーランド国家のユダヤ教徒が、国家との関係でどのようなアイデンティティを形成して行ったのかを、ポーランド国家の側のユダヤ教徒への対応も含めて検討した。吉田は、セファラディームの社会における改宗・破門・再改宗の問題を、スピノザとその周辺人物たちの思想を通して哲学的な手法で検討し、それがどのような意味をもって彼らのアイデンティティに作用したかに注目した。また、前年度に作成した見取り図に基づき、オランダ、ドイツを調査地として、史料収集を行なった。

第３段階では、各時代、地域の共通の底流をなす構造的特徴を明らかにするため、共通の問題意識の強化に努めた。しかしながら、2019 年度末から思いがけない速さで Covid-19 によるパンデミックが広がり、フィールドワーク予定や対面での共同研究会開催等が規制されることになり、本研究は度重なる研究期間の延長を申請（３回）することになった。パンデミックによる海外調査や対面規制期間中は、Zoom で会議を行う等で問題意識の共有に努めた。その結果、第３段階の最後においては、共生空間の創成要因そのものへの研究に関心を推進させ、問題意識を共有することが出来、パンデミックの終焉に備えてフィールドワーク・資料収集等の研究をさらに発展させる基盤も整える事ができた。

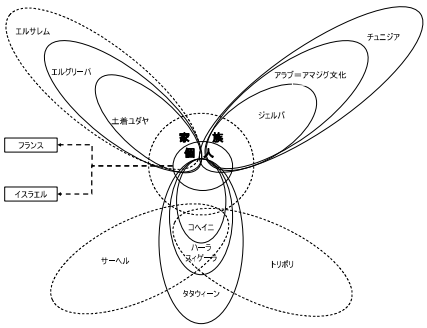
４．研究成果

本研究は、歴史状況の中で宗教的普遍性（religio）と地域的固有性（regio）の狭間で生きる場を選択してきた、ユダヤ教徒のアイデンティティ選択戦略を比較研究し、人間が本来持つ複合的で柔軟な集団編成のあり方を提示した。ユダヤ教徒は、宗教的普遍性を保持しながらもセファラディーム、アシュケナジーム、ミズラヒームという各地域の文化的固有性の中に生きる場を確保してきたが、各研究分担者の研究事例において、実態として三者間の境界は状況的で流動的である事が証明された。本研究では、このような重層的複合アイデンティティが如何なる歴的条件下で組み換え／選択されてきたのかについて解明し、地域文化的境界を前提とした近代国家体系相対化と排他的自己意識転換の可能性を示唆した。

今や地域研究においても、脱領域・越境の観点から近代的思考を相対化し乗り越えようとする研究は少なからず出てきている。しかしながら、セファラディーム、アシュケナジーム、ミズラヒームのヨーロッパと中東にわたる三地域のユダヤ教徒の歴史的アイデンティティ変遷を対象とした広汎な比較地域研究は他に例がない。中でも本研究が特に独創的なのは、近代国家の相対化をその基盤である個々の人間の帰属意識＝アイデンティティ構造に遡って考察しようとする点である。即ち、個々のアイデンティティを所与と捉えずに、本質的に流動的で変遷し選択されるものとして設定し、その複合的構造を個々人がおかれた歴史的状況の中から再構成しようとすることにあった。さらに、方法論的にも狭い専門的な枠組みに捉われがちな研究者の世界において、地域研究・歴史人類学、社会思想史・社会史、哲学史という異分野の研究者が意見を交わしながら行なった共同研究は、各分担研究者の視野を格段に拡大させる成果を伴った。各分担者における研究成果を以下に提示するが、いずれの論文においても、歴史状況の中での各地域でのユダヤ教徒のアイデンティティ選択を中心にした個々の人々の帰属意識変容のあり方が分析の中心である。

ミズラヒームを担当し、ジェルバ島のユダヤ教徒を調査拠点としてきたプロジェクト代表の田村は、島の人々のライフヒストリーの分析を通して、ユダヤ教徒の越境性と多束ネットワーク、さらにそれを可能にする多元的複合アイデンティティ構造を抽出したが、島の土着信仰の系譜を辿る研究を深めるにつれて、それが単にユダヤ教徒の特徴として限定されるのではなく、島の他のマイノリティであるイスラム教イバード派マイノリティにも同じ構造があることに気が付いた。ユダヤ教とイスラームという異なる宗教に属するマイノリティー集団ではあるが、両コミュニティはまるで双子のような相似形の社会構造を持っている。まず、それぞれの集団は一枚岩ではなく、ユダヤ教徒もイバード派も内部に宗派的分裂を抱え、両派は居住区域も異なり従来は

通婚もしなかった。しかし、また両コミュニティは産業が限られるために出稼ぎが多い島での日常生活においては、分業による相互扶助の関係にある。さらに両コミュニティの中の分派は、島外への多岐にわたる移動ネットワークをそれぞれ堅持しており、このネットワークを通じて現代に至るまで常に人々の出入りがあることも酷似している。これら両社会の比較から、マイノリティ集団の生き残り戦略としての越境性と国際的かつ複数の結節点をもつ多束ネットワークの保持、個々がそれらを活用させ得る多元的複合アイデンティティ構造を内包していることをライフヒストリーの聞き取りや文献調査などで解明し、その一端を論文にまとめた(2021)。複合アイデンティティの説明補足として、ジェルバ島ハーラ・スィゲーラに住む一ユダヤ教徒の複合アイデンティティに基づく多束ネットワーク構造を図表化してみたものを左に挙げた。



(図:ユダヤ教徒の複合アイデンティティ）

2023 年になり、やっと現地におけるフィールドワークが再開できる環境が整いつつあるので、今後も本研究を引き継ぐプロジェクトでさらにイバード派を含めた事例収集を進め、証左を詰めていく予定である。

川名は、分割前期ポーランド・リトアニア国家におけるユダヤ人のアイデンティティのありかを探る意味で、改宗の問題に注目し、改宗する側のユダヤ人および改宗を受け入れる側の国家およびカトリックの態度を検討した。続いて 18 世紀後半以降のポーランド・ユダヤ人の精神世界を揺るがした神秘主義的思想、とりわけハシディズムとフランキズムに着目し、それらを新たなアイデンティティの模索と位置づけた。更にこの視点を、19 世紀の国民国家形成の動きに連動するユダヤ人「改革派」の動きにも適応させて、近代化過程におけるユダヤ人アイデンティティの作り替えと位置づけて検討した。周囲の社会のナショナリズムの進展と、近代化過程における社会主義運動の高まりにより、ユダヤ人は民族なのかという議論も含めて、ユダヤ人アイデンティティの議論は錯綜した。その過程での典型例として「ユダヤ人ブンド」を取り上げた。

吉田はセファラディームを担当し、哲学史的には 17 世紀オランダのユダヤ人哲学者スピノザとその周辺人物、地域研究的にはオランダおよびエルベ川下流域のユダヤ教徒を調査拠点として研究を進めてきた。前者の研究成果はスピノザ受容史に関する数本の学術論文と、2022 年刊行の評伝『スピノザ―人間の自由の哲学』に一応の結実を見たと言える。中でも、本共同研究全体のテーマとの関連で特に強調しておくべき成果は、従来若きスピノザに深刻なアイデンティティ・クライシスをもたらしたかのように論じられてきたアムステルダムユダヤ人共同体からの破門事件（1656）が、実は反対に、むしろアイデンティティの軸を血縁的・民族的共同性とは別の所に置き直すため、スピノザ自身によって半ば主体的に選び取られた結果であったことを解明できたことである（同書第 2 章「破門にまつわるエトセトラ」参照）。また後者の地域研究に関しては、ハンブルク・アルトナ地区とその周辺のユダヤ人墓地に関するいくつかの報告と、その一端をまとめた学術論文「幽閉者たちの町―交易都市アルトナの成立と発展」（2023）を発表済みである。ただし、上記論文は交易都市アルトナの成立・発展の経緯を概説的にまとめるにとどまっており、ユダヤ人のアイデンティティ形成に大きな役割を果たしていたと思われる墓地の問題については、さらなる論文を構想中である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 川名隆史	４．巻 8
２．論文標題 ユダヤ人ブンドにおける新たなユダヤ民族アイデンティティの創出	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東京国際大学論叢人文・社会学研究	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 吉田量彦	４．巻 8
２．論文標題 幽閉者たちの町：交易都市アルトナの成立と発展	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東京国際大学論叢人文・社会学研究	６．最初と最後の頁 35-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 吉田量彦	４．巻 ４３
２．論文標題 超越者のいない世界の倫理と倫理学：内在の倫理、スピノザ、そしてゲーテ	５．発行年 2022年
３．雑誌名 モルフォロギア	６．最初と最後の頁 22-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田量彦	４．巻 ７号
２．論文標題 「自由殺しliberticide」の告発者：パーシー・ビッシュ・シェリーは『神学・政治論』をどう受け止めたか	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東京国際大学論叢人文・社会学研究	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田村愛理	4．巻 5
2．論文標題 イスラーム圏におけるユダヤ教徒の暮らしと祭り：ジェルバ島のエルグリーバ大巡礼祭	5．発行年 2021年
3．雑誌名 SIAS Lectures5（上智大学イスラーム研究センター）	6．最初と最後の頁 55-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 川名隆史	4．巻 6
2．論文標題 「改革派」ユダイズムの生成と興隆：18-19世紀のポーランド・ユダヤ人におけるアイデンティティの分裂(2)―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 東京国際大学論叢人文・社会学研究(研究ノート）	6．最初と最後の頁 35-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 川名隆史	4．巻 5
2．論文標題 18-19世紀のポーランド・ユダヤ人におけるアイデンティティの分裂（1)	5．発行年 2020年
3．雑誌名 東京国際大学論叢人文・社会学研究（研究ノート）	6．最初と最後の頁 59-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 吉田量彦	4．巻 41
2．論文標題 非政治的ロマン主義の源か、政治的決断主義の内なる敵か：戦間期カール・シュミットのスピノザ理解とその空白	5．発行年 2019年
3．雑誌名 モルフォロギア	6．最初と最後の頁 64-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田村愛理、村井美紀、植村清加	４．巻 4
２．論文標題 モンゴル社会変革機における女性の「自場」形成：フェルト産業を中心にして	５．発行年 2018年
３．雑誌名 東京国際大学論叢人文・社会学研究	６．最初と最後の頁 25-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　4件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 川名隆史
２．発表標題 個と普遍について：この概念は思想史研究の方法として使えるのか
３．学会等名 東京国際大学人文・社会学ファカルティ・セミナー（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 吉田量彦
２．発表標題 自著紹介
３．学会等名 スピノザ協会第32回総会（リモート開催）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 吉田量彦
２．発表標題 超越者のいない世界の倫理と倫理学
３．学会等名 ゲーテ自然科学の集い第53回総会・シンポジウム
４．発表年 2020年

１．発表者名 吉田量彦
２．発表標題 「自由殺しliberticide」の告発者：パーシー・ビッシュ・シェリーは『神学・政治論』をどう受け止めたか
３．学会等名 日本シェリー研究センター第29回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 田村愛理
２．発表標題 ジェルバ島の漂着聖女信仰に見るコムニタス的空間の生成
３．学会等名 東京国際大学第4回人文・社会学ファカルティ・セミナー
４．発表年 2019年

１．発表者名 川名隆史
２．発表標題 近代ヨーロッパ・ユダヤ人のアイデンティティの分裂
３．学会等名 東京国際大学第3回人文・社会学ファカルティ・セミナー
４．発表年 2019年

１．発表者名 田村愛理
２．発表標題 ジェルバ島の漂着聖女信仰：ユダヤ教徒の祭礼を中心にして
３．学会等名 三田史学会（島の歴史学）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 田村愛理
２．発表標題 イスラーム圏における暮らしと祭り：ジェルバ島のエルグリーバ大祭
３．学会等名 上智大学研究機構イスラーム研究センター主催公開講演会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 吉田量彦
２．発表標題 世界市民的社交性と異文化理解：『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界』によせて
３．学会等名 第27回一橋哲学フォーラム／第7回スピノザ・コネクション
４．発表年 2018年

１．発表者名 吉田量彦
２．発表標題 [神学・政治論」と「政治論」の語り口は、どう、そしてなぜ微妙に違うのか：スピノザの政治哲学再考
３．学会等名 西洋思想受容研究会2018年度研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 吉田量彦
２．発表標題 非政治的ロマン主義の源か、政治的決断主義の内なる敵か：戦間期カール・シュミットのスピノザ理解とその空白
３．学会等名 ゲーテ自然科学の集い12月東京例会（慶應義塾大学三田キャンパス）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

1．著者名 吉田量彦	4．発行年 2022年
2．出版社 講談社現代新書	5．総ページ数 416
3．書名 スピノザ：人間の自由の哲学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	吉田　量彦 (Yoshida Kazuhiko) (30614747)	東京国際大学・商学部・教授 (32402)	
研究分担者	川名　隆史 (Kawana Takashi) (60169737)	東京国際大学・経済学部・教授 (32402)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関